

「身体と文化研究会」成果報告

文化の中で生きられた身体：身体・身体化理論の応用

代表者：黄信者（HUANG Xinzhe） 国際関係研究科 博士後期課程 2 回生

研究会の問題と目的

・ 目的

本研究会は、身体を焦点に当て、文化への理解を深めるためのアプローチを探索することを目的とする。1990年代以来、身体というテーマは、ますます人間科学の中心的な役割を果たしている。人類学、文学、歴史学、政治哲学などの分野の研究者たちは、古典的社会科学の理論とボディ・マインドどちらかとつながって、またはメルロー＝ポンティの身体論に準じて心身二元論を越えて、「生きられた身体（Lived body）」を中心に議論を展開している。何れにしても、文化あるいは人間の行動を理解するため、人間の主体となる身体について、精緻な理論的考察とデータに基づいて実践的検討をする必要がある。そのため、本研究会は、各研究テーマを持つ人文・社会科学系の大学院生を集め、身体についての哲学的理論と、それを具体的研究に応用した文献を探して輪読し、さらにどのように各研究会メンバーの研究テーマと結びつき、どのように理論的枠組みを構築することを探索するについて、意見や議論を交換するネットワークを作ることである。

研究会の運営方法

・ 文献輪読

① メルロー＝ポンティの身体論

身体と文化というテーマに関する最も有名な理論の一つ、メルロー＝ポンティの代表作『知覚現象学』の第一章を輪読し、議論を行った。身体という文化のエージェンシーに対する記述の重要性を確認した。

② Csordasの身体化的アプローチ

宗教・医療人類学者Csordasは、メルロー＝ポンティの思考に基づいて、身体化的アプローチを提唱した。今回は、Csordasの代表論文を選んで、輪読した。メンバーたちは、特にpre-objectiveやindeterminacyというキーワードを巡って議論を行った。

③ 湯浅泰雄の身体論

日本の哲学者湯浅泰雄の身体論に関する2つの論文について議論を行った。メンバーたちは、湯浅の身体論は、「東洋」を代表することができるかどうかについて、意見が分かれている。

④ 身体化的アプローチを応用した研究論文

どのように身体化とい理論的枠組みを実際の研究で応用するのをおか。今回の研究会では、このアプローチを使った2つの民族誌的研究を取り上げて、文献の輪読をして、議論を行った。

・ 問題意識

デカルトの心身二元論を発表して以来、「体」と「こころ」、「主体」と「客体」を分離して、物事を考えることが研究者として非常に普遍的・理性的なことである。一方、近年、知覚現象学のアプローチで、様々な文化や社会現象に対する研究の結果から、その過去では堅固な二元論的構築は揺れ始めた。つまり、身体は、単なるこころを収めた容器としてのものではなく、あらゆるの文化を生成するために不可欠な存在であり、文化の身体化（embodiment）過程を注目する必要がある。しかし、心身二元論の長くて強い影響で、文化や社会現象を研究する時、いかに身体および身体化の理論を応用するのかは、大学院生の我々に対して、まだ不慣れで曖昧である。

そのため、①身体・身体化に関する理論および身体に焦点を当てた研究を勉強し議論を加える。②自分のテーマとどのように結びつけることについて検討する。

・ 理論の応用

本研究では、身体に関する理論的知識を確実に身につけるため、文献についての議論は、主に自分の研究とどのように関連づけることを中心に展開していた。以下の三つは、研究会で使った理論的枠組みを積極的に自分の研究に応用しようとする研究の例である。

① 気功と身体経験

従来の気功に関わる研究は、歴史的、自然科学的、臨床的研究のほか、主に社会、経済政策など巨視的な側面で気功という現象を検討した。HUANGは、日本と中国の気功現場で生じる身体経験を微視的に見ようとして、Csordasの身体化的アプローチを使い、気功練習中生じた「気」の経験を記述した。

② 宗教施設内の手作り市場と身体

YUANは、日本のお寺や神社の中の手作り市場について研究している。日本人々は宗教的施設での売買という世俗的行為を行う身体は、どのように神仏を参拝する時身体を区別するのか。YUANは、感覚、想像、環境、および間主主体性といった身体化的アプローチでこの問題を解明しようとしていた。

③ 革命模範劇と女性の身体

KONGは、中国の文化大革命での産物一革命模範劇（样板戯）を研究している。彼女は、特にその中の女性の身体を注目しており、女性の特徴をなるべく曖昧化するというのは従来の研究の結論であるが、果たしてそうなのか。KONGは女性役の外観でなく、感覚、情緒など内面的、身体的な描写から、女性役の女性の特徴を明らかにしようとした。

まとめ

本研究会では、身体を焦点に当て、文化への理解を深めるためのアプローチを探索することを目的とした。そのため、身体についての哲学的理論と、それを具体的研究に応用した文献を探して輪読し、さらにどのように各研究会メンバーの研究テーマと結びつき、どのように理論的枠組みを構築することを探索するについて、意見や議論を交換するネットワークを作った。

文献の輪読の中で、各研究会メンバーは、「身体と文化」についての様々な視座から理論について議論を行い、各自の研究に持ち込む可能性もメンバーたちとともに検討した。その中でアイデアを得て、直接に自分の研究とつながって、理論的枠組みとして応用したメンバーは2人いる。その二人は、論文を執筆し、学会発表や学術誌への投稿を行った。もう一人は、修論の執筆で本研究会の理論を活かす。

まだ自分の研究につながないメンバーらも、本研究会を通じて、身体と文化について新たな視点を獲得し、各自の今後の研究に良いヒントとなるだろう。したがって、その一年間を通して、設立の趣旨と相違なく実施し、期待通りの活動、成果発信ができたといえる。

研究成果

・ 学会発表、論文執筆

研究会メンバーの HUANG Xinzhe とYUAN Mingyangは、本研究会で議論・勉強した理論的枠組みを応用して、論文を執筆し発表を行った。KONGは、これから本研究会で勉強した理論を用いて修論の執筆に活かす。

Huang Xinzhe (2019) The Embodiment of “kimochi-ii”: Experience from a Qigong Class in Japan. Anthropology of Japan in Japan (AJJ) FALL 2019 Conference, Tokyo, Meiji Gakuin University, Yokohama Campus

Huang Xinzhe (2019) Bodily Experience and Qi: A Perspective from Phenomenology and Embodiment. The 15th China-Shanghai International Symposium on Qigong Science & 2nd China-Shanghai International Taiji Health Symposium. China, Shanghai

Huang Xinzhe (2019) “Zhi Wei Bing” (Preventive Healthcare) and Qi: Imagination, Memory, and Enskilment in Contemporary Chinese Qigong Practices. Skills of Feeling with the World – Fifth Workshop :Affective Technologies of Memory and Imagination. Kyoto, Ritsumeikan University, Suzaku Campus

Yuan Mingyang (2019) Constructing a Market inside a Temple: A Case Study of the Tezukuri Market in Chionji, Kyoto, Japan. Anthropology of Japan in Japan (AJJ) FALL 2019 Conference, Tokyo, Meiji Gakuin University, Yokohama Campus